

土木学会 景観・デザイン委員会

第19回景観・デザイン研究発表会

2023



主催 土木学会景観・デザイン委員会
第19回景観・デザイン研究発表会ウェブサイト
<https://jscedesign.jp/conference/2023>

問い合わせ先

土木学会 研究事業課 担当: 小澤一輝
E-mail : k-ozawa@jsce.or.jp Tel : 03-3355-3559

第19回景観・デザイン研究発表会

主催者挨拶	02
会場案内	04
スケジュール(研究発表会)	06
プログラム	08
口頭発表	12
ポスター発表	24
協賛広告	32

『景観・デザイン』と『・(ピリオド)』の回想



景観デザイン研究と実践デザインの発表の場が今年もやってきました。多くのみなさまのご参加に心から感謝いたします。

私もこの研究発表会に初回から参加し、それ以前の計画学研究発表会での活動も合わせると早35年を過ぎ、もうすぐゴール間近です。今回、初めて参加され、新たなスタートを切られる学生や社会人のみなさんは、フレッシュな気持ちと心地よい緊張感を持って会場にいられたと思います。果てしなく成長する知的エネルギーと躍動感をもつ皆さんが、これからの半世紀の日本を引っばっていく中心となります。そのみなさんが公共や公益のために身を尽くす情熱を持てるだけのバトンを渡すことが景観・デザイン委員会の使命であると思っています。

思い起こせば、委員会の名称である『景観・デザイン』は、多くの議論で決まった経緯があります。景観とは何かを問う原論や視知覚の分析など景観の見え方を中心としたアカデミックな「景観(工学)」と、土木施設や公共空間の実践的なものづくりの「デザイン」があり、いずれにウエイトを置く委員会であるかが議論の発端でした。その後、景観法ができ、景観行政における建築物や土木施設の規制誘導が一斉に広がり、地域の計画論も「デザイン」の中に含まれています。その結果、『景観』と『デザイン』は両方とも同等に大事なので、『景観・デザイン』と表記され、英語名は、Landscape & Design Committeeとなりました。欧米の大学では、景観や土木計画学の分野はそもそも土木に所属しない所が多く、Urban Designに近いと言われています。

土木でやる限り、スケールの大きな構造物は、当然、周囲の自然や都市の映り込みが視野にあるわけであり、単独で存在することができないのは当然のことです。地形や地盤、川や海の大いなる自然景観と密接な土木施設をどう自然に調和させて、かつ地域にユニークなメッセージを吹き込むデザインにするか。風景としてどのように届けられるか。ものづくりの最初から最後まで届けるべき風景を常に想像しデザインを続けること。これこそが土木の景観デザインの醍醐味です。それゆえ、『景観』と『デザイン』は、本来的に分離できない一体的な思考と行為のプロセスなわけです。

若いみなさまが、将来、土木人としての生きがいを感じて、研究や実践を通じてどのような幸せを感じることができるのか。どのような仲間と協力して困難な壁を乗り越えて行くのか。そのヒントや生き方のストーリーをこの学会で得ることができれば、主催者の一人として何よりうれしい限りです。

川崎 雅史

京都大学大学院 地球環境学堂 教授
土木学会 景観・デザイン委員会 委員長



今年はみなさまを、東京は文京区にお迎えすることになりました。会場は、研究発表を中央大学後楽園キャンパスで、前日のシンポジウムは東京大学本郷キャンパスで行う、という変則型になりますが、準備をととのえて多くの方のご来京を心よりお待ちしております。

とはいえ、なんだ東京かあ(いまひとつテンションあがらないな)…。と内心感じている方も、きっと、少なからずいらつしやることでしょう。出張行くみたいで新味を感じない、愛らしい町並みに会いに行くワクワク感に欠ける、その土地ならではの地酒とか名物料理を楽しめるイメージがない、などなど…。しかし東京も、全国津々浦々の都市や集落とおなじく、独自の自然と歴史文化を宿す町であり、たとえば文京区も、大通りから一歩入れば、昔ながらの地形やかつての面影に出会う

ことができる町です。時間の許す範囲で、ぜひ歩いてみていただければ嬉しいです。

一方で、おそらく、東京ほど風景の変化のスピードが速い都市は、全国でも稀かもしれません。丸の内も日本橋も品川も、渋谷も新宿も池袋も、この10年でおおきく様変わりし、これらの一見急激な変化は、現在も加速しながら各所で進行中です。この変化がいつまで続くのか、この変化をもたらしている主体はなにか、はつきりとわかりにくいのですが、よくもわるくも、現代の都市文明のありようの一端が素直に表出しているという意味で、わたしたちの分野にとって興味深い題材を提供していると思います。今回の発表会場がある文京区は、あまり変化していない方の東京ですが、お時間あればぜひ足を伸ばして、ダイナミックに変化している最中の東京の現在を広く見ていただき、研究仲間との闊達な議論と気の置けない交流のネタにしてください。願っております。

なお今回、研究発表会の会場については、中央大学の谷下雅義先生にご相談し、共同開催校委員としてご協力いただけることになりました。当日手伝ってくださる学生のみなさんも含め、発表会場担当をお引き受けいただいた中央大学関係各位に、この場を借りて、心より謝意をお伝えしたいと思います。

では、当日みなさまにお会いできることを心待ちにしております。

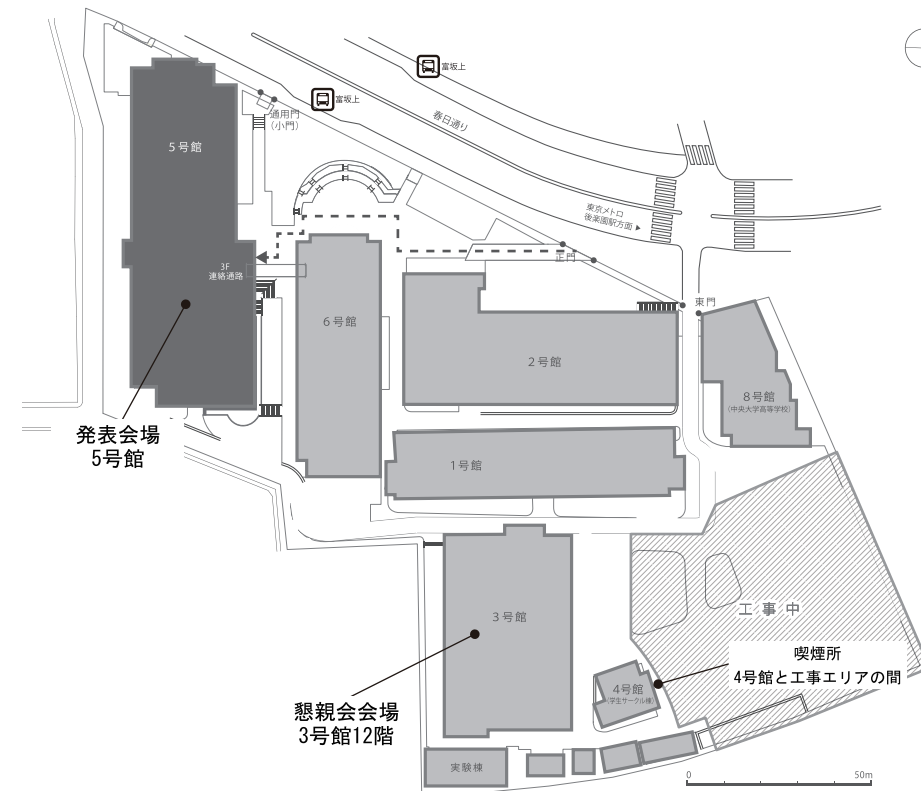
中井 祐

東京大学

発表会場へのアクセスマップ



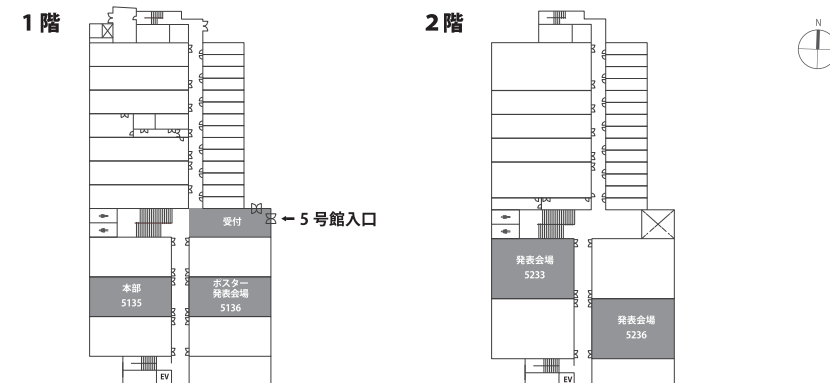
大学構内マップ



シンポジウム会場 東京大学 伊藤謝恩ホール



5号館 フロアマップ



スケジュール(研究発表会)

研究発表会 1日目 2023年12月9日(土)

セッションA1～A3 【第一会場 5233 番教室】		セッションB1～B3 【第二会場 5236 番教室】	
9:00 10:15	A1 景観の価値 真田純子(東京工業大学)	B1 水辺の景観 出村嘉史(岐阜大学)	
15min	休憩		
10:30 12:10	A2 エリアのデザイン 福島秀哉(上條・福島都市設計事務所)	B2 水と暮らし 林倫子(関西大学)	
60min	昼休み		
13:10 15:20	ポスター発表コアタイム		
10min	休憩		
15:30 17:10	A3 デザインと仕組み 柴田久(福岡大学)	B3 集落の景観 石橋知也(長崎大学)	
30min	休憩・移動		
17:40 19:40	懇親会(3号館12階)		

研究発表会 2 日目 2023 年 12 月 10 日 (日)

セッションA4～A6 【第一会場 5233 番教室】		セッションB4～B6 【第二会場 5236 番教室】	
9:00 10:15	A4 情報と行動 笠間聡(寒地土木)	B4 水辺とまち 二井昭佳(国士舘大学)	
15min	休憩		
10:30 12:10	A5 空間と行動 星野裕司(熊本大学)	B5 地域の記憶 田中尚人(熊本大学)	
68min	昼休み		
13:30 15:10	A6 景観評価 白柳洋俊(愛媛大学)	B6 景観論 中井祐(東京大学)	
10min	休憩		
15:20 15:40	クロージング		

Memo

9:00	セッションA1：景観の価値 第一会場 5233 番教室	9:00
10:15	 座長 真田純子 (東京工業大学) 一専門分野ー 農村風景、石積み ー代表プロジェクトー 石積み学校、風景をつくるごはん C 部門 公共空間における宿根草植栽の可能性と課題に関する一考察 吉村晶子 (名城大学) D 部門 沼津市中心市街地の都市形成過程と景観価値の関係に関する研究 山田莉緒 (法政大学大学院) ／福島秀哉, 福井恒明 D 部門 景観関連事業における効果測定手法の傾向と課題に関する考察 谷口勇雅 (福岡大学) ／三宅エリザベス, 柴田久, 池田隆太郎	10:15
休憩 (15 分)		

10:30	セッションA2：エリアのデザイン 第一会場 5233 番教室	10:30
12:10	 座長 福島秀哉 (上條・福島都市設計事務所) 一専門分野ー 景観工学、土木デザイン ー代表プロジェクトー 隠岐の島町西郷港周辺エリア整備、今治市中心市街地まちづくり構想他、「まちを再生する公共デザイン」(共著、学芸出版社)、「コミュニティのかたちと復興区画整理」(共著、鹿島出版会)、「(ムラナカ)の公共デザイン」(東京大学出版会) A 部門 サンキタ通り及び広場の設計 - 歩行者中心の公共空間設計の事例として - 小粥慶子 (マサチューセッツ工科大学) ／小野寺康 B 部門 神戸市における公共空間デザイン施策について ～都心・三宮再整備における実践状況～ 清水陽 (神戸市) D 部門 古賀駅東口エリア再整備事業におけるエリア内の連携に配慮した駅前再開発に関する考察 新久保委 (福岡大学大学院) ／柴田久, 池田隆太郎 B 部門 複数公園の一体的再整備事業のプロセスに関する実践的研究 - 長崎市横尾地区の9街区公園を対象として - 中村太一 (中央コンサルタンツ株式会社) ／石橋知也	12:10
昼休み (60 分)		

13:10 15:20	ポスター発表 コアタイム 5136 番教室	13:10 15:20
休憩 (10 分)		

15:30	セッションA3：デザインと仕組み 第一会場 5233 番教室	15:30
17:10	 座長 柴田久 (福岡大学) 一専門分野ー 景観設計、まちづくり ー代表プロジェクトー 警固公園、さいき城山桜ホール及び周辺地区、大分昭和通り、「地方都市を公共空間から再生する」(学芸出版) など B 部門 デザインノートと共創的都市デザイン戦略 福島秀哉 (株式会社上條・福島都市設計事務所) D 部門 重要文化的景観選定範囲内の公共事業設計協議の体制と運用に関する事例分析 川上健太 (法政大学大学院) ／佐瀬優子, 福井恒明 A 部門 益城町・震災記念公園のデザインと監理 増山晃太 (株式会社風景工房) ／山田裕貴, 小宮山洋 D 部門 橋梁デザイナー大野美代子の設計思想と社会実装 ～首都高速道路における事業者との協働に着目して～ 萩原貴之 (政策研究大学院大学 (現：首都高速道路株式会社)) ／福井恒明	17:10
休憩・移動 (30 分)		

17:40 19:40	懇親会 3 号館 12 階	17:40 19:40
----------------	-------------------------------------	----------------

9:00	セッションB1：水辺の景観 第二会場 5236 番教室	9:00
10:15	 座長 出村嘉史 (岐阜大学) 一専門分野ー 都市形成史、景観計画 ー代表プロジェクトー 代表論文：木曾川上流支派川改修と土地改良－近代水系基盤形成のための連携構築プロセス－(令和元年土木学会論文賞) 代表作品：とみばーくのデザイン、美殿町ラボの製作と運営 B 部門 大阪府における大規模土木構造物の景観検討ー安治川水門更新事業を対象としてー 岡本歩 (大阪府西大阪治水事務所) ／川上卓, 重山陽一郎, 久保田善明 A 部門 Design with Tailor-made Concrete 友寄篤 (東京大学) D 部門 嵐山の一の井堰の景観価値に関する研究 三宅純 (国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所) ／文字聖, 深町加津枝	10:15
休憩 (15 分)		

10:30	セッションB2：水と暮らし 第二会場 5236 番教室	10:30
12:10	 座長 林倫子 (関西大学) 一専門分野ー 土木史・景観形成史 ー代表プロジェクトー 『日本風景史』(共著、昭和堂)、滋賀県水害履歴調査 D 部門 徳島市川内町の旧海岸堤防の修復経緯と現状 倉田瞭一 (東京工業大学大学院) ／真田純子 D 部門 石垣嵩上げに着目した近代以前のローカルな水害対策の定量的評価 白洲瞭 (東北大学大学院) ／平野勝也, 天谷友哉 B 部門 レインガーデンを軸とした市民関与型グリーンインフラの地域実装 滝澤恭平 (ハビタ) ／矢部満 D 部門 川と人々との日常的な関わりの保全と創出ー水辺空間整備に関する知見の整理ー 鶴田舞 (一般財団法人国土技術研究センター)	12:10
昼休み (60 分)		

13:10 15:20	ポスター発表 コアタイム 5136 番教室	13:10 15:20
休憩 (10 分)		

15:30	セッションB3：集落の景観 第二会場 5236 番教室	15:30
17:10	 座長 石橋知也 (長崎大学) 一専門分野ー 景観学、都市形成史 ー代表プロジェクトー 星野川災害復旧助成事業、波佐見町文化的景観調査、本明川ダム景観検討、風景デザイン研究会など D 部門 LUCAS を基にした新たな土地基礎情報調査手法の提案 永井睦基 (東京工業大学) ／真田純子 D 部門 UAV-SfM による三次元復元技術を用いた集落景観の記録手法についての基礎的考察 田中椋 (一般社団法人アーバンデザインセンター坂井) ／毛利祐輝, 山口敬太, 川崎雅史 C 部門 生活と生業の変化から見た漁業集落の景観変遷 金子由愛 (東北大学大学院) ／平野勝也 D 部門 既存集落との関係からみた防集団地の立地と空間構成 ～岩手県三陸リアス地域を対象として～ 田口凌介 (株式会社トーニチコンサルタント) ／二井昭佳	17:10
休憩・移動 (30 分)		

17:40 19:40	懇親会 3 号館 12 階	17:40 19:40
----------------	-------------------------------------	----------------

9:00	セッションA4：情報と行動	第一会場 5233 番教室
10:15	 座長 笠間聡 (寒地土木研究所) D部門 記号論に基づく変化検出課題を用いた住宅表層における来街者の注意要素分析 岩間響平(東北大学大学院)／平野勝也 D部門 行程が旅行期待値に与える影響 梶田祥之介(大阪工業大学大学院)／田中一成 D部門 エリア価値向上に向けた効果的なサイン・イベントのあり方に関する研究 齊藤汐音(国土館大学大学院)／西村亮彦 一専門分野一 屋外公共空間と地域の魅力向上、自然域のインフラ景観 一代表プロジェクト一 北海道の色彩ポイントブック、茨城空港景観修正計画検討、大分市景観計画	

休憩 (15分)

10:30	セッションA5：空間と行動	第一会場 5233 番教室
12:10	 座長 星野裕司 (熊本大学) D部門 認知機能低下高齢者の散歩行動を促す空間特性と景観デザインの可能性に関する基礎的考察 柴田久(福岡大学)／池田隆太郎, 坂本健介, 渡辺孝司 D部門 駅から駅前広場への賑わいの表出 一駅の結節空間と歩行者広場の関係一 三谷勇太(東北大学大学院)／平野勝也 D部門 道路における歩行行動に与える影響評価について 村元至穂(大阪工業大学大学院)／田中一成 D部門 歩車共存型デザインを通じた駅前広場における歩行者優先の実施方策に関する研究 廣澤里花(国土館大学大学院)／西村亮彦 一専門分野一 土木デザイン 一代表プロジェクト一 白川・緑の区間、曽木の滝分水路、熊本駅周辺都市デザイン	

昼休み (80分)

13:30	セッションA6：景観評価	第一会場 5233 番教室
15:10	 座長 白柳洋俊 (愛媛大学) D部門 灯台の景観評価に関する一考察 一抽象衝動・感情移入論を踏まえて一 高木俊輔(東京工業大学) D部門 住宅地街路に着目した街路樹樹形に関する研究 渡邊立樹(大阪工業大学大学院)／田中一成 D部門 機窓景観に関する基礎的研究 一“ダイブゾーン”の概念と記述方式の開発一 植村恒平(東京工業大学) D部門 物理法則に基づく認知による圧迫感形成 ～重さ感による試行的検証～ 西尾春人(東北大学大学院)／平野勝也 一専門分野一 環境心理学 一代表プロジェクト一 肱川かわまちづくり、JR伊予市駅周辺整備	

休憩 (10分)

15:20 15:40	クロージング	第一会場 5233 番教室
----------------	--------	---------------

	セッションB4：水辺とまち	第二会場 5236 番教室	9:00
10:15	 座長 二井昭佳 (国土館大学) D部門 明治期の大阪大川納涼場の営業実態及び市内遊所とのつながり 山口匡輝(関西大学)／林倫子 D部門 都市河川空間の都市化の把握手法に関する研究 一内川と新内川の流水景を事例として一 佐藤康一(東北公益文科大学) D部門 まち空間と融合した河川空間実現過程に関する基礎調査 飛田ちづる(国土交通省国土技術政策総合研究所)／松本浩 一専門分野一 土木デザイン、防災景観論 一代表プロジェクト一 太田川大橋(広島)、桜小橋、大槌町吉里吉里地区復興まちづくりなど		

休憩 (15分)

	セッションB5：地域の記憶	第二会場 5236 番教室	10:30
12:10	 座長 田中尚人 (熊本大学) D部門 意味理解への態度が地域アイデンティティの認識と形成に与える影響に関する研究 一地域と景観を対象として一 近石さゆり(株式会社上條・福島都市設計事務所)／泊尚志 D部門 昭和初期における体験主義に基づく郷土教育の理論と実践手法 寺崎真由(京都大学)／山口敬太, 谷川陸, 川崎雅史 C部門 まちづくりに資する共有知としてのまちの記憶とその共有のあり方 一「池上まちよみプロジェクト」を例に一 佐瀬優子(法政大学) D部門 3時点の連続立面写真から捉える住民による「まち語り」の特徴と意味 太田恭平(早稲田大学大学院)／佐々木葉 一専門分野一 土木史、景観マネジメント 一代表プロジェクト一 通潤用水下井手水路の改修、崎津・今富の文化的景観整備、菊池市かわまちづくり、『都市を編集する川ー広島太田川のまちづくり』(共著、溪水社)、『風景のとらえ方・つくり方ー九州実践編ー』(共著、渠率出版)		

昼休み (80分)

	セッションB6：景観論	第二会場 5236 番教室	13:30
15:10	 座長 中井祐 (東京大学) C部門 京都吉田における神楽と浄土の風景 川崎雅史(京都大学) D部門 和辻哲郎『風土』における「間柄」の試論 山村美保里(愛国学園短期大学) C部門 人新世の現代における人間的主体の陥穽とその超克 山下三平(九州産業大学) C部門 風景体験の楽しみとレッスン 佐々木葉(早稲田大学) 一専門分野一 土木デザイン、景観論 一代表プロジェクト一 中野駅周辺地区デザイン調整、大槌町津波復興、竹田城下町再生		

休憩 (10分)

	クロージング	第一会場 5233 番教室	15:20 15:40
--	--------	---------------	----------------

セッション 12月9日(土) 9:00～10:15 会場：第一会場 5233 番教室

A1 景観の価値

座長：真田純子(東京工業大学)

C：論説・評論部門

公共空間における宿根草植栽の可能性と課題に関する一考察

吉村晶子(名城大学)



宿根草を用いたランドスケープデザインは、市民の①環境への心が育つ、②現場への心が育つ、ことへの効果が期待できるほか、公共的にも③環境への責任ある主体を育てる、④市民参加のあり方を示す、など、持続可能な環境と社会の実現に向けた貢献ができる可能性がある。しかし、課題として、現時点での①公共空間の設計・維持管理の枠組みでは対応しきれない要素をもち、また②これまでの市民参加の枠組みでは対応しきれない面もあるため、関与する人材の個人的努力に成否を委ねざるをえない現状がある。個人による奮闘努力があれば良好な空間ができ地域活性化に貢献する可能性があるが、人材の疲弊が続くと地方から人材が流出してゆきかねないなど地域衰退につながる懸念があり、いま、認識の共有と枠組みの整備が求められる。

D：調査・研究部門

沼津市中心市街地の都市形成過程と景観価値の関係に関する研究

山田莉緒(法政大学大学院)／福島秀哉, 福井恒明



持続可能な地域戦略に向けて、地域社会の特徴の一つである地域住民の環境認識と都市形成過程を踏まえた空間的特徴との関係性を読み解くことは今後のまちづくりにおいて重要な課題である。本研究の対象である沼津市中心市街地は、自然・歴史・観光・文化にわたる多様な地域資源を有し、それらを活用した持続可能な観光戦略・地域戦略の推進が課題となっており、ヒト中心のまちづくりを目指した様々な取り組みが行われている。本研究の目的は、沼津市中心市街地の都市形成過程と地域資源の特徴を整理し、景観価値との関係性を明らかにすることである。文献調査とアンケート調査の結果から、景観価値の分布の特徴や重層性など、景観価値と都市形成過程を踏まえた空間的特徴との関係性に関する特性を指摘した。

D：調査・研究部門

景観関連事業における効果測定手法の傾向と課題に関する考察

谷口勇雅(福岡大学)／三宅エリザベス, 柴田久, 池田隆太郎



2004年の景観法成立以降、景観計画の策定とともに、景観に配慮した様々な事業が実施されてきている。しかし、美的価値を含む景観関連事業においては、上記便益に対する客観的な指標や評価の難しさが指摘されており、事業自体の意義や効果をいかに測るべきか、知見の蓄積が求められる。そこで本研究では、景観関連事業の効果に関わる既存研究の知見を体系的に整理し、その測定指標等の傾向と課題、さらに国土交通省の実態を踏まえた景観関連事業における測定手法の傾向と課題について考察を行った。その結果、1)景観関連事業効果の測定主体と手法の推移、2)効果測定における実務と研究の差異、3)景観に対する定性的な効果測定の意義について明らかにした。

セッション 12月9日(土) 9:00～10:15 会場：第二会場 5236 番教室

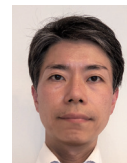
B1 水辺の景観

座長：出村嘉史(岐阜大学)

B：計画・マネジメント部門

大阪府における大規模土木構造物の景観検討ー安治川水門更新事業を対象としてー

岡本歩(大阪府西大阪治水事務所)／川上卓, 重山陽一郎, 久保田善明



本稿は、西大阪地域における高潮対策として昭和45年に建設された安治川水門の更新事業における景観検討の取組みについて報告する。景観検討に当たっては、大阪市景観計画や大阪府景観形成基本方針を始めとする各種行政計画に基づきつつ、学識経験者の意見を聴きながら、アイデアコンペの開催等によるアイデア募集を経て、詳細設計と景観設計を並行して実施するなど、景観に配慮するための独自の取組みを行った。さらに、今後の工事実施に向けては、デザイン監理の仕組みも導入することとしている。

A：デザイン作品部門

Design with Tailor-made Concrete

友寄篤(東京大学)



海の上に立つかのような敷地、過密配筋を避けた構造とかぶり厚さ、時に吹雪になる日本海側の冬季打設。特徴を数え上げればきりが無いが、JIS製品であるレディーミストコンクリートが届けられる現場はどれも唯一無二である。たとえFc=24、スランプ18cmであっても、同じコンクリートはどこにもないし、ここにしかない仕立てであって欲しい。そんなTailor Made Concreteが広がっていくことを願ってやまない。

D：調査・研究部門

嵐山の一の井堰の景観価値に関する研究

三宅純(国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所)／文字聖, 深町加津枝



桂川嵐山地区は、文化財保護法上の史跡及び名勝に指定されており、四季折々の美しい景観を有する観光地となっている。一方、同地区は治水安全度が低く、近年毎年のように浸水被害が発生している。そのため、国土交通省では平成16年台風23号洪水対応を目的とした3つの治水対策(可動式止水壁による左岸溢水対策(令和4年3月完了)、一の井堰改築、堰改築を含む派川改修)について、学識者や地元との協議を重ねている。本研究は、嵐山の重要な景観要素である一の井堰の改築検討の基礎資料とすることを目的に、文書・絵葉書・地形図に基づき現在までの一の井堰の変遷(堰形式、舟運利用、落水表情など)を明らかにした上で、嵐山における一の井堰の景観価値について考察した。

セッション 12月9日(土) 10:30～12:10 会場：第一会場 5233 番教室

A2 エリアのデザイン

座長：福島秀哉(上條・福島都市設計事務所)

A：デザイン作品部門

サンキタ通り及び広場の設計 -歩行者中心の公共空間設計の事例として-

小粥慶子(マサチューセッツ工科大学) / 小野寺康



本稿は、日本が成熟・縮小社会へ突入し、さらにコロナ禍により公共空間への需要が高まる中で行われたサンキタ通りとサンキタ広場の再整備について設計者の立場から報告するものである。本整備は神戸三宮「えきまち空間」のパイロットプロジェクトに位置付けられ、歩行者中心の空間を創出することを目的とした。デザイン過程においては通りと広場を調和的につなぐことや歩道部と車道部の統一感、阪急高架下との連携などに留意した。竣工後には利用者層の変化やイベント活用の増加が見られ、官民で長期的なビジョンを持ってハードとソフトの両面から取り組む公共空間の設計事例となった。一方で長期的な維持管理手法という課題も残っている。本整備の神戸三宮「えきまち空間」への波及効果と、より積極的な公共空間利活用に向けた取り組みの継続が望まれる。

B：計画・マネジメント部門

神戸市における公共空間デザイン施策について ～都心・三宮再整備における実践状況～

清水陽(神戸市)



神戸市では、公共空間のデザインの質が地域の魅力やにぎわいに重要な要素であることに着目し、平成20年代以降、有識者によるデザイン協議制度の創設など公共空間デザイン施策を推進している。現在、都心三宮再整備など各種プロジェクトが進む中、これら施策を運用し、公共空間整備を実践している。施策全般の紹介と都心・三宮再整備における実践状況、課題について報告し、公共空間デザイン向上のための議論の材料としたい。

D：調査・研究部門

古賀駅東口エリア再整備事業におけるエリア内の連携に配慮した駅前再開発に関する考察

新久保委(福岡大学大学院) / 柴田久, 池田隆太郎



古賀駅の東口エリアでは再開発事業が進められている一方で、新宮、古賀、福津、宗像は「しこふむエリア」として連携を図りながら来訪者増加などを目指している。駅まち空間の重要性が挙げられる近年、上記エリアにおける各駅まち空間の連携や関係性についても検討が必要だろう。本研究では、本事業の特徴的プロセス及び成果を詳述した上で、上記エリア主要駅周辺の空間構成の比較を行い、本事業におけるエリア内連携に配慮した駅前再開発について考察した。その結果、①駅と文化拠点を繋ぐシンボル空間軸がエリア内連携の観点からも評価できる点、②再開発後における工場への景観の配慮等の明確化に向けた合意形成の在り方、③エリア全体の連携を見据えた個性のある商業圏・居住ゾーン的重要性、が明らかとなった。

B：計画・マネジメント部門

複数公園の一体的再整備事業のプロセスに関する実践的研究 -長崎市横尾地区の9街区公園を対象として-

中村太一(中央コンサルタンツ株式会社) / 石橋知也



自治体は地区全体で公園を再整備し、各々の機能を特化・相互補完する取り組みを進めている。長崎市横尾地区では、施設の老朽化や少子高齢化により、利用者ニーズに施設の機能が適さなくなっている。市は同地区の9公園の機能や設備の再整備を計画している。本研究では、長崎市横尾地区公園再整備計画事業を対象に、参与観察により、再整備案の策定に係るワークショップや協議等のプロセスを詳述し、複数公園を一体的に再整備する観点での議論の要点や、課題等を抽出した。その結果、ワークショップを開催するうえでの緻密な準備の必要性、公園づくりに対する参加者の意識変容、公園全体に関する議論の工夫の重要性、一体的検討による各役割の把握のしやすさ、を指摘した。

セッション 12月9日(土) 10:30～12:10 会場：第二会場 5236 番教室

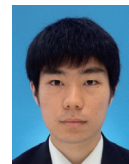
B2 水と暮らし

座長：林倫子(関西大学)

D：調査・研究部門

徳島市川内町の旧海岸堤防の修復経緯と現状

倉田瞭一(東京工業大学大学院) / 真田純子



本研究では徳島市川内町にある旧海岸堤防について、建設・修復経緯と現存する部分の現状を明らかにすることを目的とする。明治～大正時代に発生した水害に関する資料や新聞記事を分析した結果、1892年7月の海嘯によって決潰した後に復旧されたこと、その後1918年の台風被害でも損壊し復旧されている可能性があることが明らかとなった。また写真を分析した結果、積み石に複数の種類の石が使用されていること、積み石の先端が揃っている箇所が確認できた。以上のことから、旧海岸堤防は完成時の状態で現在まで残っているのではなく、1892年の海嘯をはじめとした水害後に修復工事がされたものであることが明らかとなった。

D：調査・研究部門

石垣嵩上げに着目した近代以前のローカルな水害対策の定量的評価

白洲瞭(東北大学大学院) / 平野勝也, 天谷友哉



災害の激甚化や人口減少による成熟社会を背景として、大量の税金を投じた大規模事業により洪水を堤外に封じ込める治水が限界を迎えつつある。公共的治水の役割が小さかった明治以前の自然発生的な私的・共同体的な水害対策、すなわちローカルな水害対策の実態を把握することは、今後公共だけでなくあらゆる主体による治水を実現するために必要な知見であると言える。そこで本研究ではローカルな水害対策の一つとして石垣による嵩上げに着目し、氾濫解析によりそれらの持つ水害への効果を浸水深と流速により測定した。その結果、浸水深については嵩上げによって一定の水準を下回る効果があること、流速については一貫した傾向は見られないものの、各地区特有の事情がその効果に影響する可能性が示唆された。

B：計画・マネジメント部門

レインガーデンを軸とした市民関与型グリーンインフラの地域実装

滝澤恭平(ハビタ) / 矢部満



小規模分散型治水に向けて、レインガーデン等の市民が関与できるグリーンインフラ手法が必要とされている。葉山町において地域主体が協働を行い、レインガーデンを地域実装するために有効であったプロセスを明らかにすることを研究目的とする。地域資本を活用したスモールプロジェクトを立ち上げ、地域主体の関心と参加意欲を高め、公園において、流出計測の上、定量的な計画目標を設定し、レインガーデンを市民普請で実現した。スモールプロジェクト連鎖による地域の機運醸成、地域の水の流れに関与する媒介をつくること、オープンな目標設定システムによる参加意欲の向上が、地域実装では有効であった。

D：調査・研究部門

川と人々との日常的な関わりでの保全と創出 -水辺空間整備に関する知見の整理-

鶴田舞(一般財団法人国土技術研究センター)



河川の水辺空間整備に関するこれまでの研究成果等を技術指針へ組み込むことを目指し、現技術指針における「川と人々との日常的な関わりでの保全と創出」に係る記載状況を整理した。技術基準には、「動植物の良好な生息・生育・繁殖環境の保全・創出」等と比して、技術的知見や関連手続き等の提示は少なかった。そこで、水辺空間整備手法に関する知見を、整理結果と対応させながら提示した。また、今後必要な検討の方向性として、保全・創出目標の設定手法や、治水・環境と両立した水辺利活用空間の設計手法等を示した。

セッション 12月9日(土) 15:30～17:10 会場：第一会場 5233 番教室

A3 デザインと仕組み

座長：柴田久(福岡大学)

B：計画・マネジメント部門

デザインノートと共創的都市デザイン戦略

福島秀哉(株式会社上條・福島都市設計事務所)



縮退時代においては、各地域の特性に合わせて都市の縮退と地域力の向上を同時にかなえる、新しい都市デザインやまちづくりの手法が求められている。本稿は、東日本大震災の復興事業において提案され、その後各地のまちづくりで展開されているデザインノートによる、ヴィジョン化(Visioning)を通して、共創的都市デザイン戦略の取組みについて論じるものである。

D：調査・研究部門

重要文化的景観選定範囲内の公共事業設計協議の体制と運用に関する事例分析

川上健太(法政大学大学院)／佐瀬優子, 福井恒明



文化財保護法に基づいて選定された重要文化的景観の選定範囲内で行われる公共事業は、文化的景観の保存との両立を図るために協議調整が必要であるが、事例の蓄積や検証は十分とはいえない。本研究は、個々の重要文化的景観における公共事業設計協議の具体的な内容について実態を明らかにすることを目的とし、重要文化的景観選定地区内の公共事業6件を対象に設計協議の実態を把握した。設計協議を進める上での課題として、文化的景観担当部署と公共事業担当部署の間での専門家の助言内容に関する正確な理解、設計協議の対象となる設計項目に関する共通認識、設計協議の内容や深度に関する公共事業担当部署側での設計協議に対する想定の違いを課題として指摘した。

A：デザイン作品部門

益城町・震災記念公園のデザインと監理

増山晃太(株式会社風景工房)／山田裕貴, 小宮山洋

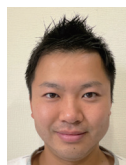


益城町の震災記念公園は、2016年に発生した熊本地震の震災の記憶をとどめること、気軽に集まって日常的に憩える場所となることを目指してつくられた新設の公園である。町役場の新市庁舎、復興まちづくりセンター「にじいろ」に囲まれた敷地にあり、「いのちの記憶の継承」と位置付けられたモニュメントが設置されていることが大きな特徴である。本論文は、プロポーザルから設計、デザイン監理まで設計者として関わった立場から、その内容について報告するものである。

D：調査・研究部門

橋梁デザイナー大野美代子の設計思想と社会実装 ～首都高速道路における事業者との協働に着目して～

萩原貴之(政策研究大学院大学(現：首都高速道路株式会社))／福井恒明



1980年代以降、橋梁デザイナーという職能の先駆者として全国で数多くの橋梁設計を手掛けた大野美代子について、長年に渡り橋梁デザインを手掛けた首都高速道路で技術者と協働しながらその設計思想がどのように社会実装されたのかを明らかにすることを本研究の目的とする。大野と協働した人々へのインタビューを行い、仕事の進め方や設計の過程について確認した。その結果、首都高速道路社内での大野の立場や影響力が時代によって変化し技術者側にも考え方の変容があったことから、橋梁デザインにおける協働の仕方が変化していったことが明らかとなった。また、事業者は大野に橋梁デザインの依頼を継続的に行うための契約方法について長年模索し最終的には一定の評価を得たものの、これが橋梁デザイナーという職能存続の課題のひとつであることを指摘した。

セッション 12月9日(土) 15:30～17:10 会場：第二会場 5236 番教室

B3 集落の景観

座長：石橋知也(長崎大学)

D：調査・研究部門

LUCASを基にした新たな土地基礎情報調査手法の提案

永井睦基(東京工業大学)／真田純子



現在、地球温暖化を中心に環境問題への意識が高まっている中、様々な政策も環境を重視した形にシフトしている。しかし、そういった政策を評価する日本の調査や指標はまだ整備されていない。そこで、より先進的な政策や活動を展開している欧州で行われている調査であるLUCASをベースにして、日本の地形条件などに合わせた日本版LUCASの提案を行った。現地調査や空中写真、関連する統計を基に分析を行い、調査地点を決めるメッシュ幅として1.5km、各調査での記録項目を提案した。

D：調査・研究部門

UAV-SfMによる三次元復元技術を用いた集落景観の記録手法についての基礎的考察

田中椋(一般社団法人アーバンデザインセンター坂井)／毛利祐輝, 山口敬太, 川崎雅史



土地固有の集落景観が失われつつあり、速やかな現況調査や変化の把握が必要となるなか、簡便に実施可能な調査記録手法の確立が求められている。本稿では、UAV-SfMによる三次元復元技術に着目し、集落景観の調査記録手法としての精度と有効性について考察を行った。具体的には、構成要素単位、敷地構成単位、集落単位の各スケールでの分析における三次元モデルの活用可能性を示した。また、撮影高度40m, 70m, 100mで撮影・作成した三次元モデルの比較を通して、UAV-SfMの適切な条件設定について考察を行った。

C：論説・評論部門

生活と生業の変化から見た漁業集落の景観変遷

金子由愛(東北大学大学院)／平野勝也



近年、日本の漁業集落における「漁業集落らしさ」は希薄になっている。この体感を客観的に示し、漁業集落らしさが失われた要因を明らかにすることは、今後の漁業集落の在り方を考える上で重要である。本論文は記号論を用いて、漁業集落の景観の変遷を分析することで、漁業集落らしさが失われた要因となる生活と生業の変化を明らかにすることを目的とした。写真サンプリングを用いた通史的な分析から、特に昭和50年代の機械化や漁港整備などを背景とした生活と生業の変化が要因であることが考察された。景観に表出する生活や生業が変化している可能性が示された以上、従来の漁業集落らしさから、新たな漁業集落らしさに理想像を切り替えて漁業集落の在り方を考える必要があるのではないかと。

D：調査・研究部門

既存集落との関係からみた防集団地の立地と空間構成 ～岩手県三陸リアス地域を対象として～

田口凌介(株式会社トーニチコンサルタント)／二井昭佳



本稿は、災害への備えと日々の暮らしを両立する継承可能なまちを実現する計画論の実装化を目指し、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県三陸リアス地域の6市町を対象に、既存集落との関係からみた防集団地の立地と空間構成について考察した。その結果、市町ごとに防集団地の整備手法に特徴があること、8割を越える防集団地が既存集落に接して整備されていることなどを明らかにした。それらを踏まえ、継承可能な集落を目指すには集落における防集団地の配置、既存集落と防集団地の立地関係、防集団地の空間デザインの3つの観点に配慮して防集団地を計画・整備することが重要であることを指摘した。

セッション 12月10日(日) 9:00～10:15 会場：第一会場 5233 番教室

A4 情報と行動

座長：笠間聡(寒地土木研究所)

D：調査・研究部門

記号論に基づく変化検出課題を用いた住宅表層における来街者の注意要素分析

岩間響平(東北大学大学院)／平野勝也



住宅地において居住者の暮らしや営みがうかがえることは、他者との関わりの中で生きる人間にとって重要であり、そのような景観は「生活景」と呼ばれている。この「生活景」を成り立たせているのが、居住者と観察者との間でなされる情報伝達である。そこで本研究では、戸建住宅の表層において視認できる情報発信媒体としての要素を記号論に基づいて取り上げた上で、情報の受信者側である観察者の無意識的な注意を探るため、チェンジ・ブラインドネス現象を用いた変化検出課題を行った。その結果、要素毎に無意識的な注意の向きやすさに差が確認され、また注意されやすい要素とされにくい要素にはそれぞれ共通の特徴があることが示唆された。

D：調査・研究部門

行程が旅行期待値に与える影響

梶田祥之介(大阪工業大学大学院)／田中一成



旅行に対して抱く期待は、様々な要因から影響を受けている。本研究では、余暇時間における訪問先での活動だけではなく、距離、時間、交通といった目的地までの行程に着目した。旅行行程における期待値を記述することで、観光地の差異を統計的に明らかにし、最終的にはGISを用いて行程にもとづいた地域の現状を定量化することを目的としている。研究方法として、旅行期待値と居住地から観光地への距離の関係、同様に交通利便性との関係の二つの項目についてアンケートにより調査をおこなった。この結果、距離と交通利便性と旅行期待値との関係を明らかにし、結果をGISを用いて数量化をおこなうことで地域全体の期待値の構造をみいだした。

D：調査・研究部門

エリア価値向上に向けた効果的なサイン・イベントのあり方に関する研究

齊藤汐音(国土館大学大学院)／西村亮彦



渋谷公園通り周辺では近年、駅周辺の再開発やコロナ禍の影響でまちなかを歩く人が減少し、地区の活気が失われつつある。2021年に官民連携の「渋谷公園通り協議会」を立ち上げ、エリア価値向上に向けたイベントやエリマネ広告等の収益事業の検討を進めている。本研究は、渋谷公園通りエリアをフィールドに、サイン設置の現状を把握するとともに、地域の事業者によるサイン及びイベントのニーズや自治体の関連施策と方針を明らかにした上で、サイン設置・イベント開催の社会実験を通じて、サイン設置やイベント開催が来街者の回遊行動や訪問先に与える影響等、対象エリアの魅力発信の可能性を明らかにするものである。調査・分析の結果、今後の渋谷公園通りエリアにおける効果的なサイン揭示及びイベント開催の方策検討に資する知見と、具体的な方策案を提示することができた。

セッション 12月10日(日) 9:00～10:15 会場：第二会場 5236 番教室

B4 水辺とまち

座長：二井昭佳(国土館大学)

D：調査・研究部門

明治期の大阪大川納涼場の営業実態及び市内遊所とのつながり

山口匡輝(関西大学)／林倫子



本研究では、歴史的な都市における水辺の位置づけを検討するため、かつての大阪に存在した水辺の盛り場である大川納涼場を取りあげ、大川納涼場の営業実態および周辺市街地や市内遊所とのつながりを明らかにした。大川納涼の営業は6月から8月にかけて盛んであり、橋上納涼、涼み船などの仮設店舗の営業者が多く参入していた。市内各川筋の遊所や船着場から、通船を利用して納涼客を大川に招くという広域的なつながりが、大川納涼場の賑わいを支えていた。

D：調査・研究部門

都市河川空間の都市化の把握手法に関する研究 ―内川と新内川の流水景を事例として―

佐藤康一(東北公益文科大学)



本研究は、都市河川を対象として、河川空間内部の河道に着目した流水景を提案するとともに、流水景と都市空間との関係を分析し、河川空間の都市化の実態と課題を明らかにすることを目的としている。都市空間の土地利用は、住宅地、商業地、工業地に区分され、表情の異なる空間を創り、人々の生活もそれぞれの区分で異なっているが、河川景観については、このような区分が存在しない。そこで、流水景の都市化を人為的造形の視点で9分類し、この分類で河川の延長方向を区分し、都市の土地利用との関係性を捉えた。山形県鶴岡市の市街地を流れる内川と新内川を対象に、両河川の流水景の都市化の程度を明らかにするとともに、流水景と沿川の土地利用・人口密度との関係の違いを明らかにすることができた。都市化の分類の自然の優位性、人為的優位性とは異なる景観の優位性の捉え方を課題とした。

D：調査・研究部門

まち空間と融合した河川空間実現過程に関する基礎調査

飛田ちづる(国土交通省国土技術政策総合研究所)／松本浩



本研究は、まち空間と融合した良好な河川空間形成の実現過程に着目し、既存の事例を分析、整理する。今回は公開情報を中心に国内外の主な事例の収集と類型化を行い、特徴をまとめた。調査目的から6つの視点を設定し事例を収集、選定し、国内外を、利用目的、事業主体等から比較した。利用目的は共通性があり、事業主体は、民間事業者等の数、国内事例の協議会に相違がある。また、事例全体の傾向から、今後の調査の視点を挙げた。

セッション 12月10日(日) 10:30～12:10 会場：第一会場 5233番教室

A5 空間と行動

座長：星野裕司(熊本大学)

D：調査・研究部門

認知機能低下高齢者の散歩行動を促す空間特性と景観デザインの可能性に関する基礎的考察

柴田久(福岡大学)／池田隆太郎, 坂本健介, 渡辺孝司



2025年には65歳以上の認知症患者数が約700万人に達するとされ、介護者への負担軽減を目指し、認知機能低下高齢者ができるかぎり自立した生活を続けられるよう、安全かつ健康的な外出を促す地域づくりの重要性が挙げられる。本研究では、福岡市にある「宅老所よりあい」「第2よりあい」の施設管理者、介助員、施設を利用する認知症高齢者を対象にヒアリング・観察調査を実施し、認知機能低下高齢者の散歩行動を促す屋外の空間特性ならびにこれに基づく今後の景観デザインの可能性等について考察した。その結果、①散歩行動を促す空間特性と保全整備のあり方、②包摂的なサポート・コミュニティ形成の重要性、③超高齢社会における景観デザインの可能性と課題を明らかにした。

D：調査・研究部門

駅から駅前広場への賑わいの表出 一駅の結節空間と歩行者広場の関係—

三谷勇太(東北大学大学院)／平野勝也



近年、都市の駅前再開発は「駅まち空間」や「駅まち一体開発」という考え方のもと、建物単体ではない面的開発が重要視されている。また、駅は益々、商業施設やホテル等の多用途と複合化し、駅は旅客のみならず様々な施設利用者による賑わいが見られるようになっていく。一方、駅前広場に目を向けると駅の複合化による賑わいと一体化した広場もあれば、通過するだけであまり人がいない広場となっている場所も見受けられる。駅まち一体の第1歩目である駅と駅前広場の賑わいの関係に着目したい。駅で賑わっている場所はどのような空間か、駅の賑わいが広場に表出しやすい条件はどのようなものか見出すことを試みた。なお、本研究は、今後予定している分析の仮説の有効性を確認するための試行である。

D：調査・研究部門

道路における歩行行動に与える影響評価について

村元至穂(大阪工業大学大学院)／田中一成



現在の日本において人口減少・超高齢化社会の到来、シェアリング・エコノミーの出現、人中心の道路利活用ニーズ、道路内への滞留ニーズ、にぎわい創出といった社会・経済情勢の変化、あるいはCASEなど道路に関する新たな技術の登場や電動キックボードなど新たなモビリティの出現に伴い、道路に対する利活用ニーズは従来にも増して多様化している。そこでわれわれは道路の快適性(通りやすさや・歩きやすさ)は道路を利用する方法(歩行、自転車)によって異なりこれらを可視化することで歩行者や自転車の利活用を図ることに寄与すると考える。本研究では移動速度と占有幅に着目し快適性の数値化をおこない、道路図上に可視化をおこなった。

D：調査・研究部門

歩車共存型デザインを通じた駅前広場における歩行者優先の実施方策に関する研究

廣澤里花(国士舘大学大学院)／西村亮彦



駅前広場は歩行者及び自動車の交通量が多く、様々な目的の下に住民によって利用される生活基盤であることから、安全かつ快適な歩行空間となることが求められている。目黒区では祐天寺駅周辺地区整備計画を策定し、駅周辺街路における歩車共存空間の導入も視野に入れた、ウォークアブルな歩行空間の実現に向けた検討を進めている。本研究は、歩行者を優先とした再整備が望まれる祐天寺駅周辺地区を対象に、歩行環境や利用状況に着目しながら、歩車共存型広場の先行事例との比較・分析を行い、歩行環境の改善に効果的な歩車共存型デザインの導入に資する知見を得るものである。調査・分析の結果、歩車共存型の広場空間における歩行者優先の実現にあたり、車両進入時の速度抑制と、一般車両による歩行者との交錯機会の削減、横断箇所集約・整序が重要であることが明らかになった。

セッション 12月10日(日) 10:30～12:10 会場：第二会場 5236番教室

B5 地域の記憶

座長：田中尚人(熊本大学)

D：調査・研究部門

意味理解への態度が地域アイデンティティの認識と形成に与える影響に関する研究 —地域と景観を対象として—

近石きゆり(株式会社上條・福島都市設計事務所)／泊尚志

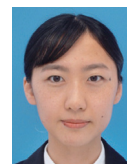


本研究では、人と地域との心理的な結びつきの観点から人が景観や地域に対する向き合い方としての態度に着目し、人の景観や地域に対する意味理解への態度が地域アイデンティティの認識と形成に与える影響の把握を試みた。文献調査を通じて景観や地域に対する意味態度の重要性について論じた上で、アンケート調査の実施を通じて、景観や地域に対する態度の差異が、地域アイデンティティの主体的な認識と形成に影響を与える可能性を把握した。

D：調査・研究部門

昭和初期における体験主義に基づく郷土教育の理論と実践手法

寺崎真由(京都大学)／山口敬太, 谷川陸, 川崎雅史



本研究では、昭和初期の大分県女子師範学校における体験主義の郷土教育に着目し、学習カリキュラムや指導内容の実態を明らかにした。我が国では、大正後期に児童の生活や体験を基礎とする新しい郷土教育の考え方が生まれ、昭和初期に文部省の政策の中で体験教育が重視されるようになった。なかでも、大分県女子師範学校では郷土の調査方針が確立され、学年ごとの学習配当案の中で児童に何を学ばせるかが詳細に示された。児童主体の発案のもとに学校外での実地踏査を行い、自然と人との豊かな関係性を肌で感じ、その情感を芸術表現させる指導がなされた。これにより、児童が体験・認識する郷土の範囲を拡充し、郷土愛や郷土自治の精神を涵養することで、郷土の改善や発展を企画する人材の育成が意図された。

C：論説・評論部門

まちづくりに資する共有知としてのまちの記憶とその共有のあり方 —「池上まちよみプロジェクト」を例に—

佐瀬優子(法政大学)



近年、まちづくりや地域課題の解決に向けて行政と住民との協働が求められる中、住民の積極的かつ幅広い参加を下支えするものとして、まちへの理解や愛着を育むことの重要性が高まっている。地域史学習やまちづくりワークショップなど、理解や愛着につながる活動は全国各地で無数に行われているが、まちづくりに資するような共有知を実現するためには、活動間の連携の強化や、俯瞰的な視座に基づく活動運営が欠かせない。本稿では、東京都大田区池上においてまちの記憶の共有と継承を目指す市民活動「池上まちよみプロジェクト」を対象に、これまでの活動内容と課題を整理した上で、より効果的に活動を継続していくために必要な判断枠組を設定し、今後の方向性について考察した。

D：調査・研究部門

3時点の連続立面写真から捉える住民による「まち語り」の特徴と意味

太田恭平(早稲田大学大学院)／佐々木葉



本研究では、自らが暮らすまちについて語ることを「まち語り」と定義し、特に町並みから生じる「まち語り」の特徴を明らかにすることを目的とする。複数の住民から「まち語り」を引き出す共有媒体として、「3時点の連続立面写真」を使用したインタビュー実験を行った。得られた語りのコーディングとその後の分析をもとに、語りのシークエンスを図化することで、その特徴を明らかにした。また、以上を踏まえた上で「まち語り」が持つ意味について考察し、「語られるまち」として地域を考える上で何が求められているのか、「公共性」をキーワードに据えた今後の議論の方向性を示した。

セッション 12月10日(日) 13:30～15:10 会場：第一会場 5233番教室

A6 景観評価

座長：白柳洋俊(愛媛大学)

D：調査・研究部門

灯台の景観評価に関する一考察 ―抽象衝動・感情移入論を踏まえて―

高木俊輔(東京工業大学)



自然景観にある構造物は目立たないことを求められがちであるが、灯台は例外の様である。本論文ではその要因を探るべく印象評価実験を工夫した所、海岸の景観を眺める人々にとって、灯台は抽象衝動と感情移入の両面から評価されている可能性が示唆された。用いた評価実験手法はSD法と一対比較法であるが、SD法は、抽象衝動と感情移入のそれぞれとの近接性が高い形容詞を抽出するために、一対比較法は、それらの形容詞に対し、刺激として提示する様々な景観写真の相対的距離を判定するために用いた。上述の結果は、ダミーで挿入した灯台以外の構造物と比較して特異的であることも示唆された。

D：調査・研究部門

住宅地街路に着目した街路樹樹形に関する研究

渡邊立樹(大阪工業大学大学院)／田中一成



今日、沿道にはさまざまな街路樹が植樹されている。その街路樹は自治体の景観計画等に沿って植樹されているが、街路樹の計画は幹線道路や商業地域が対象にされ、住宅地の街路樹景観の計画を詳細に策定していることは少ない。そこで住宅地の街路樹計画に寄与する空間デザインの手法を明らかにするため、本研究では住宅地域で好まれる街路樹の樹形に着目してアンケート調査を行った。その結果、住宅で好まれる樹形を明らかにした。

D：調査・研究部門

機窓景観に関する基礎的研究 ―“ダイブゾーン”の概念と記述方式の開発―

植村恒平(東京工業大学)

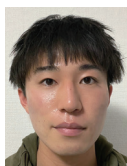


現代の交通行動における景観体験として機窓景観が挙げられるが、その考察はなされていない。着陸進入時にみられる山岳の見えかたの変化に着目し考察することで、機窓景観特有の体験―“ダイブゾーン”の概念を見出す。また、言葉や写真による分析だけでなく、数量的な表現方法(タイムライン)を開発し、ルートや空港毎の比較例を提示する。

D：調査・研究部門

物理法則に基づく認知による圧迫感形成 ～重さ感による試行的検証～

西尾春人(東北大学大学院)／平野勝也



建物外観から受ける圧迫感について、従来の研究では大きさや建物までの距離等に基づくものしか行われてこなかった。本研究では認知分野の研究結果を踏まえ、人間が視覚情報から自らの経験・獲得している物理法則を働かせ、その推定結果から印象評価を行なっているという観点に着目し、圧迫感形成には視覚から得た建物の重さ感を基とした推定結果が起因しているという仮説を検証した。その結果、重さ感が大きいほど圧迫感が増大する傾向が見られ、圧迫感形成には仮説のようなプロセスが踏まれていることが考察された。

セッション 12月10日(日) 13:30～15:10 会場：第二会場 5236番教室

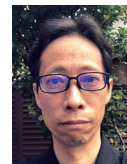
B6 景観論

座長：中井祐(東京大学)

C：論説・評論部門

京都吉田における神楽と浄土の風景

川崎雅史(京都大学)



本稿は神楽岡(吉田山)と紫雲山の丘陵と東山景観の眺望景観について、地勢的な視点から論考したものである。神楽岡には、近世まで吉田神道の中心地として栄えた吉田神社があり、その東隣りの紫雲山には、浄土宗を開いた法然上人の草庵である金戒光明寺と真如堂が存在している。さらに東側の東山には、慈照寺敷地の前進の浄土院(旧浄土寺)、法然院など浄土宗の寺院が集積した。浄土教の布教と習練の場所としての景観が集約されてきた場所である。神楽岡と紫雲山の間には天皇陵があり、紫雲山には広域的な墓地が存在している。神仏は異なっても、神楽岡と紫雲山の2つの丘陵は京都の中心的な聖域の場所であり、小さな領域ではあるが、浄土観と神道のもつ宇宙観が合わさり、集合的なコスモロジーを感じ取ることができる。その地形や配置や方向性、眺望を合わせて、聖域の風景を考察するものである。

D：調査・研究部門

和辻哲郎『風土』における「間柄」の試論

山村美保里(愛国学園短期大学)

和辻哲郎著の『風土』は、土木景観学をはじめ多分野から注目のある著名な論考で、1927年ドイツ留学中に発表されたハイデガー存在論から着想され、帰国後2年間の草稿が基となって1935年に発表された。本稿は、和辻風土学の根幹概念である「間柄」に着目し、1930年当時の思考の過程が記されていると評される著書を中心に、和辻が「間柄」を創出した背景と、「間柄」に見出した特徴を抽出することを試みた。孤立する個ではない共同態における人間とその関係から存在を構成する意図があることが確認された。

C：論説・評論部門

人新世の現代における人間的主体の陥穽とその超克

山下三平(九州産業大学)



本研究は人々の生活が自然のシステムを大きく変えた地質年代とされる「人新世」にあって、科学技術とその思想が果たした役割を考察する。とくに近代科学技術の思想背景である近代精神と近代主義の違いを明らかにし、そのうえで近代精神の陥穽を追究する。いつばう、人新世の時代における気候変動への緩和と適応には、科学技術の革新に依存し、結果的に問題の先送りと潜在的危機の増大に与するのでなく、近代主義の超克としての、「絶対的決定即自己決定」という、人間的主体の成立の根底に宿る「大自然(漱石)」との絶対的な関係性の覚醒をととし、大自然に応じ、真に自律的に生きる道を進むべきことを提唱する。

C：論説・評論部門

風景体験の楽しみとレッスン

佐々木葉(早稲田大学)



景観づくりの議論では、環境を客体化し、そのあるべき姿を客観的に明らかにして、それに向かって対象を操作する、という思考がある。本稿ではそうした呪縛を解体し、私の風景体験を現象学的に捉え、他者とともに生きる世界の生成の契機となる風景体験に向かっていくための力の必要性を説く。あわせてその力を育むレッスンの場の実践の試みを報告する。

会場	5136 番教室
掲示期間	12月9日(土) 9:00～12月10日(日) 15:00
発表コアタイム	12月9日(土) 13:10～15:20
※ポスター発表コアタイムには、ポスターの著者が質疑に応じます。それ以外の時間もご自由にご覧ください。	

A：デザイン作品部門

意中の景観 伊勢二見

北岡彩那(株式会社スペースビジョン研究所)



三重県伊勢市二見町の五味家では長きにわたり、禅宗寺院の密厳寺の歴史をもつ土地を引き継いできた。本研究では五味家に残された史料から、伊勢二見の内在的な地域景観の発見を目的とする。研究方法として二見町全体を描いていた「密厳寺持分絵図」を基に、近現代の国土地理院旧版地図等から土地利用の変遷を把握する。この結果より伊勢二見の景観構成を再考する。
絵図史料等の把握より伊勢二見の内在的景観として、伊勢のしめ縄文化が二見町において表象的存在であると考えた。このしめ縄から景観構成の再考として、式年遷宮により続いてきた伊勢神宮と周囲の町である二見町の関係性を表現した都市表象図を提案した。これらを伊勢市立図書館にて展示したことで、現在伊勢二見に暮らす人に対し、新たな景観認識の形成契機として提案することができた。都市表象図によって日々の伊勢二見と暮らしの関係を見出す意中の景観として展望する。

D：調査・研究部門

地域価値を高める橋梁デザイン～コンセプトualデザインを考える

二井昭佳(国土舘大学)／安仁屋宗太, 石原大作, 松井哲平, 大波修二, 上原一真



近年、魅力的な公共空間の創出により、地域・都市再生を目指す動きが世界的に加速している。その代表格は道路空間再編プロジェクトで、水辺を核としたエリア再編プロジェクトも増えつつある。こうした状況に対し、地域価値を高める橋梁のあり方が求められている。
上記の背景のもと、景観デザイン委員会の橋梁デザイン小委員会では、2022年度より「地域価値を高める橋梁デザイン論」の構築を目指した研究活動を実施している。
本稿では、橋の構想から大まかな形に関わる「コンセプトualデザイン」に注目し、既往の橋梁デザインに関わる言説について整理するとともに、地域価値を高める橋梁デザインに必要な検討項目やプロセスについて、現段階の議論内容を提示する。

D：調査・研究部門

聖橋模型製作から見た山田守の造形と成瀬勝武の構造

永井千皓(日本大学)／高野圭太, 神津汰地, 澤田莉乃, 富永裕二, 水野雅也, 関文夫

2023年は関東大震災から100年目の年である。聖橋は、建築家山田守と土木技術者成瀬勝武の作品である。通信建築の先駆者で、モダニズム建築を実践し、曲面や曲線を用いた個性的、印象的なデザインの山田守と、コンクリート構造、鋼構造に精通し、構造的合理性を追求する成瀬勝武によって設計された橋である。聖橋には、単円は一切使用されていない。アーチリブには、構造合理性の高い懸垂曲線が用いられ、鉛直材間の曲線には、こう腹曲線が用いられ緊張感のある独特の造形が生まれている。左岸アーチこう台上に設けられたアーチカルバートは、78°と72°20'の2つの斜角の変化を吸収するために3次曲面の曲線が用いられている。ここでは、聖橋を題材に、CGと1/50模型でその詳細を製作し、その造形と構造について分析し、考察を加えたものである。聖橋の美しさは、この二人のこだわりから生まれたものである。

A：デザイン作品部門

伸縮可能性の高いラティストラス橋製作

野口大樹(日本大学)／只野翔悟, 多田優輔, 関文夫



当大学の構造・デザイン研究室ではオープンキャンパスで高校生にもものづくりの楽しさやクリエイティブな土木の存在を認知してもらうために、過去9年間に渡り9橋の木製歩道橋を製作し、木橋を渡る体験をしてもらってきた。今回のポスターではこれまでに制作した9橋の木製歩道橋に共通する構造発想及び造形発想や新しい構造の仕組み、景観の紹介と昨年製作した木製歩道橋である伸縮式ラティストラス構造と製作過程の紹介をする。伸縮式ラティストラス構造とはマジックハンドの伸縮性とラティストラス構造に着目し、ウェブ材を伸縮させたものである。伸縮率は取納時と施工後で約5.0倍になるように設計し、ウェブが伸縮することで過去の木製歩道橋より施工時間を短縮でき、災害で橋が崩落するなどの緊急時に人を渡すために役立つものである。このような取り組みが高校生だけでなく土木技術者に、クリエイティブな土木の存在を認知してもらう事を目的にしている。

D：調査・研究部門

東京都心部における橋詰空間の空間特性と整備・管理方針及び利用者意識

福井昂平(法政大学大学院)／荻原知子, 福井恒明



現代の橋詰広場には多様な空間状態があり、重要な公共的機能を果たしている一方で、フェンスで囲われていたり、橋梁改修計画等の際に橋梁本体と切り離されて整備・運用方針が一体的に議論されなかったりする状況にある。この理由として、橋詰空間が公共空間としてどのような貢献をすればよいか明確でないことや、場所によって所有や管理の様態が様々で、活用方針や運営方針が不明瞭であることが考えられる。そこで本研究では、現状の橋詰空間が、行政にどのように整備・管理され、市民にどのように利用・認知されているのかを明らかにすることを目的とし、空間調査により水辺や隣接建物とのアクセス状態・設置物や植栽の管理状況等を把握し、管理者・整備者へのヒアリング調査と橋詰近隣の利用者へのアンケート調査を実施した。その結果、橋詰空間を空間特性の観点から分類したうえで、その空間の在り様をめぐる管理者・利用者意識の関係性を明らかにした。

A：デザイン作品部門

世界最長プレストレストアイスブリッジ4mに挑戦

鈴木真風(日本大学大学院)／種村瞬, 小藪隆太, 浅井秀亮, 関文夫



2022年10月、二貫氷のブロックを構造材として並べ、プレストレス力を与えることにより、3mの梁構造で人を渡すことに成功した。2023年に4mの氷の橋に挑戦することになった。スパンが3mから4mになったことで、技術的な課題は、数倍に膨れ上がった。
氷は、自重が重く、圧縮強度が弱い材料であるため、3mのスパンで、桁高スパン比が1/15で限界となり、新たな構造が必要となった。そこで、プレストレスの偏心量を大きくできる張弦梁構造を採用した。また、4mとなると32個のブロック氷が必要となり、張弦のデビエータ構造の設計、施工が複雑化した。設計では、偏心量を確保しながらの応力管理が重要となり、骨組み解析を行い、構造のモデル化と張力管理を算定した。施工では、外気温の高い中での作業は、極めて速い施工、精度の高い施工、瞬時のプレストレス管理が求められた。ここでは、4mのスパンに張弦梁構造を用いて人を歩かせようとするアイスブリッジを報告する。

会場 5136 番教室
 掲示期間 12月9日(土)9:00～12月10日(日)15:00
 発表コアタイム 12月9日(土)13:10～15:20

※ポスター発表コアタイムには、ポスターの著者が質疑に応じます。それ以外の時間もご自由にご覧ください。

D: 調査・研究部門

東京圏における市民参加型広場の空間特性と提供者及び利用者意識

前澤健心(法政大学大学院)／荻原知子, 福井恒明



従来、空き地などの管理主体が不明瞭な空間では市民の自己責任のもと多様な活動が行われていた。しかし、現在の多くのオープンスペースは公共や民間から提供された空間がほとんどで、リスク回避や管理のしやすさといった観点が重視され、市民の活動や自主性が制限されかねず、市民が公共空間に自分事として関わる意識の醸成が必要と考える。こうした中、市民が構想から整備に至る段階や管理運営に主体的に関わる市民参加型広場の可能性が期待されているが、管理運営体制や利用実態は未だ整理されていない。そこで本研究では、東京圏における市民参加型広場を対象に、市民がどのように整備・管理運営に携わり、どのように利用・認知しているかを可視化することを目的とし、現地調査ならびに提供者・利用者へのヒアリング調査を実施した。その結果、提供者と利用者の関係性及び空間特性の観点から、現代都市における市民参加型広場が果たす役割を明らかにした。

D: 調査・研究部門

地域活動における地域史共有の実態把握モデルの構築

新井奏音(法政大学)／佐瀬優子, 福井恒明

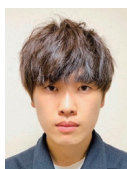


近年のまちづくりでは、多様な主体が積極的にまちづくりに参加することが望ましいとされており、主体性は住民にも求められる。住民が主体的にまちづくりに参加するためには、地域学習などによる地域の理解と愛着の醸成が必要不可欠である。中でも、歴史を理解することは重要であり、地域史の共有に取り組む地域活動が各地でさまざまな形で展開されている。しかし、地域史情報の扱いや、ボランティアによる運営の難しさから停滞又は衰退してしまう活動が少なくなく、地域史を活用した地域活動のノウハウは未だその確立の途上にある。本研究では、地域活動において地域史料をどのように扱っているかを可視化することを目的とし、東京都大田区池上で行われている地域史共有の活動を対象に、ヒアリング調査ならびに現地調査を行い、地域史料とその活用方法を分類することで、活動における地域史共有の実態把握モデルの構築を行った。

D: 調査・研究部門

七尾・敦賀における港湾と背後地域の連携

大旗望(法政大学大学院)／佐瀬優子, 福井恒明



本研究では、近世から港町として栄えた七尾・敦賀を対象に、空間的連携・視覚的連携・活動的連携の3つの観点から港湾と背後地域の関係性を分析した。空間的連携については旧海岸線を境目とした街路網の連続性の現況把握、視覚的連携については水際線と旧海岸線における現地調査、活動的連携については港に関係したイベントの調査を行い、これらの調査結果を組み合わせることにより、港湾と背後地域の関係性を明らかにした。また、港湾と背後地域の連携を考える上で、中心市街地と港湾機能を有する地域の位置関係が重要になり得ることを示した。

A: デザイン作品部門

長崎大学文教キャンパスモールのデザインとプロセス

石橋知也(長崎大学大学院)／中村太一, 豊丹生拓真, 花城美紗妃, 牧野高平

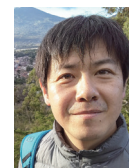


長崎大学では、2021年11月にキャンパスモール整備計画コンペが開催された。本報告では、コンペ実施の経緯、最優秀賞を受賞した提案内容、その後の施設部との整備計画の協議、設計から施工に至るプロセス、現在の利用状況等について説明する。コンペの1次審査では29点の応募から5点の入選提案が選ばれ、2次審査を経て、最優秀賞1点、優秀賞2点が決定された。最優秀賞の提案は「ひと・こと・ときを編む並木道」を全体テーマに、一体的・長期的整備を見据えること、静と動(歩行動線)の切り替え、時間をデザインする、というコンセプトを掲げた。2021年度中に、最優秀賞の提案者と施設部とで協議を重ね、最優秀賞提案内容を基本とする構想(整備計画、基本設計)がまとめられた。2022年度は前年度の構想を基とした実施設計の検討に移り、12月より施工が開始される。2023年6月に整備が完了し共用に至っている。

D: 調査・研究部門

スイスと日本の地方小都市を対象とした歩行空間構成要素の比較分析

岩田圭佑(国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所)／笠間聡, 上田真代, 福島宏文



近年、道路空間を活用して賑わいと地域の豊かさを創出するための実践が、大都市・中都市の中心市街地など、日常的に歩行者が往来するエリアを中心に行われるようになってきた。一方、多くの人々が移動を自動車に依存し、街なかを歩きたくなる魅力も不足している地方小都市では、自動車でのアクセスを前提としつつ、「道の駅」や地域拠点施設、公共施設などに見られる局所的な人の賑わいを周辺に波及させていく空間の実現が重要と考える。そこで本研究では、日常から平時の歩行活動が習慣として根付いており、駐車場等の配置と歩行者空間が効果的に配置されていると考えられるスイスの一般的な地方小都市と、日本および北海道の一般的な地方小都市を比較分析し、地方小都市の拠点施設周辺の回遊行動に寄与しうる「魅力を高める外部資源・沿道施設の見せ方」と「アクセシビリティを高める駐車場のつくりと歩行者動線」について考察する。

A: デザイン作品部門

九州デザインシャレット 2023 in 福岡天神

池田隆太郎(福岡大学)／高尾忠志, 柴田久, 星野裕司, 田中尚人, 石橋知也, 増山晃太



近年、にぎわいづくりや居場所づくり、健康増進、地域防災力の向上等、様々な観点から、これまでの概念や制度の枠を超えて、道路、河川、公園、広場等の公共空間を積極的に利活用し、心地よい時間と多様な交流を生み出すことで、都市や地域の価値を高める取り組みが増えています。公共空間の計画、設計、施工、運用に携わる専門技術者には、こうした新しい時代の価値観に対応した能力が求められています。本演習では「まちの中心をリ・デザインする」をテーマとして、3泊4日で基本計画図と模型(1/200)を製作してデザイン計画を提案することを課題としました。全国から集まった30名の受講生が5チームに分かれて、講義やエスキースを重ねながら、グループワークを行いました。

会場 5136 番教室
 掲示期間 12月9日(土)9:00～12月10日(日)15:00
 発表コアタイム 12月9日(土)13:10～15:20

※ポスター発表コアタイムには、ポスターの著者が質疑に応じます。それ以外の時間もご自由にご覧ください。

D: 調査・研究部門

農村集落の魅力の表現分析—長野県開田高原におけるメディアと語りから

小林央国(早稲田大学大学院)／佐々木葉



美しい村として評価されている長野県開田高原に関連するブログ記事や広報誌、SNS投稿を対象として、生活者・来訪者が抱く開田高原への認識をコロナ禍前後の変化・不変化にも注目しながら、KH Codeによるテキストデータの探索的な分析を試みた。また従来からの集落居住者および別荘地居住者等への聞き取り調査により、地域まちづくりの実態およびその課題を把握した。これら地域の主体によって表現された開田高原の魅力、資源、課題の分析を通して、社会情勢が変化していくなかにおける農村集落の持続的な地域まちづくりの方向性を議論するための際の論点を提示した。

A: デザイン作品部門

地域価値を高める橋梁デザイン—道路橋にみるコンセプチュアルデザイン

石原大作(パシフィックコンサルタンツ株式会社)／伊東靖、大波修二、金東熙



近年、魅力的な公共空間の創出により、地域・都市再生を目指す動きが世界的に加速している。その代表格は道路空間再編プロジェクトで、水辺を核としたエリア再編プロジェクトも増えつつある。こうした状況に対し、地域価値を高める橋梁のあり方が求められている。

上記の背景のもと、景観デザイン委員会の橋梁デザイン小委員会では、2022年度より「地域価値を高める橋梁デザイン論」の構築を目指した研究活動を実施している。

本稿では、国内の道路橋におけるコンセプチュアルデザインの事例として、天龍峡大橋及び筑後川大橋のデザインプロセスを紹介する。

D: 調査・研究部門

ラウンドアバウト中央島のデザインに関するケーススタディ

榎本碧(国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所)／増澤諭香、笠間聡、福島宏文



2014年の改正道路交通法の施行により日本においてラウンドアバウト(以下、RAB)の導入が進められ、2023年3月時点で全国に155箇所が整備されている。RABは環道、中央島、エプロンなどで構成され、このうち特に中央島は交差点の景観に影響を及ぼす要素である。現状、日本では、中央島の設計方法は『道路構造令の解説と運用』や『ラウンドアバウトマニュアル』等の資料に詳細に規定されていない。一方、欧米では中央島へのランドスケープ導入が推奨され、設計速度やRABの規模に基づき見通し距離や植栽範囲が定められている。また中央島の形状は、遠方からのRABの認知や交通の円滑性への影響も検討されるべき点である。本研究では、欧米の事例や寒地土木研究所の走行実験、造園の築山設計に関する先行研究を参照し、中央島デザインについてのケーススタディを行った。

B: 計画・マネジメント部門

流域治水のための雨庭の実践

田浦扶充子(九州大学)／高田浩志、所谷茜、島谷幸宏



近年の豪雨災害を受け、流域治水の考え方に基ついた雨庭(レインガーデン)の実践が活発化してきている。筆者らは、2021年に熊本県立大学内に雨庭を整備し、流出抑制効果の検証を試みた。整備については、ヒゴタイ等の地域植生を主に導入し、河川を模したデザイン、砕石層を設ける等の工夫を行った。また、流入流出量の計測を実施している。

A: デザイン作品部門

風景塾の運営体制の構築と実践

菱田佑樹(岐阜大学大学院)／伊藤慧哉、青木真穂、藤井汰地、駒月健太、鈴木裕也、出村嘉史



風景塾とは、学生と社会人を対象とした、自然から都市に至る空間の土木・建築・ランドスケープのデザイン及びその思考方法について、中部を拠点に学び、研鑽するワークショップである。第3回目となる今回では、「道路空間の再編—岐阜都市軸の要となる交差点をデザインする」をテーマとして、プレレクチャー、エクスカッション、2日間のグループワークでの設計を実践した。この運営にあたり、今後も風景塾を持続的に発展させ、学生・若手エンジニア相互のつながりが形成され蓄積されることを意図して、今年度から学生スタッフが主体的に運営に関わるしくみを構築した。学生スタッフは、講師陣とともに企画・教材の準備に参加し、対象エリア周辺の模型の作成、会場設営と当日の運営サポート、事後のアーカイブ作成に携わった。これら学生スタッフの活動の成果を報告する。

D: 調査・研究部門

新上五島町北魚目における市場を介さない食料供給サービスの実態に関する研究

佐々木大和(熊本大学大学院)／田中尚人



文化的景観は「人と自然の共同作品」であり、人が自然と関わりながら暮らすことが文化的景観を保全し、後世に継承するためには重要であるとする。その中で、食料の自家生産は、自然と密接に関わっており、そのような市場を介さない食料供給は当該地域での暮らしや生活文化を支えている。そこで、本研究では重要文化的景観の選定地である新上五島町北魚目を研究対象地として、市場を介さない食料供給の実態を明らかにすることを目的とした。具体的には、集落の暮らしや生活文化に関する統計データや地域環境の変遷を整理した上で、集落単位で自家生産及びおすそ分けに関するインタビュー調査を行った後、集落内における市場を介さない食料供給のネットワークの構造を明らかにする。今後は得られた知見をもとに、市場を介さない食料供給のネットワークの成立条件や特徴、文化的景観のマネジメントに関して考察する予定である。

会場 5136 番教室
掲示期間 12月9日(土)9:00～12月10日(日)15:00
発表コアタイム 12月9日(土)13:10～15:20

※ポスター発表コアタイムには、ポスターの著者が質疑に応じます。それ以外の時間もご自由にご覧ください。

D: 調査・研究部門

地方都市における緑が持つ価値の継承に関する研究

岩下佳澄(熊本大学大学院)／田中尚人



都市の緑は多様な機能を持ち、景観や暮らしを支える重要な要素である。しかし、気候変動や都市構造の変化、生活様式の見直しなど様々な社会的要請や対応の複雑化により、緑が持つ価値が曖昧となり次世代への継承が難しくなっている、と考えた。本研究の目的は、地方都市を対象に緑が持つ価値を継承するための考え方と要件を明らかにすることである。文献調査やヒアリング調査等を通して緑の価値を持続可能な形で、実践的に継承するための知見を得ることを目標としている。具体的には、岡山市、熊本市、浜松市などの緑の基本計画と全国都市緑化フェアを研究対象として、自治体及び現場関係者が持つ緑の価値と継承の実態を明らかにした。その結果、緑が持つ価値を継承していくためには、緑の構成要素のバランスが良い施策づくり、緑・人・活動の場のつながりを生むシステムづくり、様々なプロセスにおいて緑の価値を高めていく事が重要であることが分かった。

D: 調査・研究部門

伝統的枯山水の機能評価と現代雨庭のデザイン

山下三平(九州産業大学)／森本幸裕、阿野晃秀、丹羽英之、深町加津枝、佐藤辰郎、横田雅紀



日本で雨庭を普及させるためには、欧米の形式を単純に移入するのではなく、我が国の雨庭の先駆けと考えられるような、伝統的な雨水管理の事例を見出し、その特性と機能を明らかにして、それに基づいて雨庭をデザインするのが持続的と考えられる。本研究は19世紀初頭に整備され、その後大きな改変を受けることなく雨水を貯留・浸透させてきた枯山水庭園を取り上げる。実測によるその機能評価を行い、機能発揮の条件を調査したうえで、新しい雨庭の実装と機能の実測評価を試みる。

C: 論説・評論部門

なれるまち - 中心市街地を再構築する試み -

安田尚央(株式会社イー・エー・ユー (EAU岐阜))／
出村嘉史、駒月健太、藤井汰地、山田蓮人、宮川朗、青木佑太朗



岐阜市中心市街地柳ヶ瀬において、現況の問題を整理し、近年までに提示されてきた世界を牽引する都市論を参考にしながら、次世代の柳ヶ瀬が進むべき道を考察した。その結果、新たな共同の形、風土性の顕在化、大小のスケールにおける越境、を実現するまでに「熟れた(なれた)」まちを構想した。今回はその第一歩として、あらゆるステークホルダーが既存の価値観を転換する具体的なデザインを検討した。まず、市街地を建物とそれ以外に区別して、その他の管理・所有関係を一旦捨象することで柳ヶ瀬の空間構成を捉え直すことを試み、大小様々なスクエアの連続的な配置を見立てた。見立てられた新たな空間のまとまりに着目し、構想に沿った新たな場の活用のデザインパターンを見出した。これらは互いに重なりながら連続的に顕れることで、柳ヶ瀬の新たなライフスタイルを構築するための社会基盤として機能することが期待される。

D: 調査・研究部門

北海道の中小都市の市街地構造および街並み景観に関する類型整理

笠間聡(国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所)／福島宏文、岩田圭佑



「ウォークラブルなまちなかづくり」や「居心地が良く歩きたくなる」などが目下、まちづくりや地域活性化を考える上でのキーワードとして注目されている。一方で、過疎化に加え、公共交通の衰退と自動車依存の顕著な拡大などを背景とし、人が歩く市街地などは当面望むべくもなく、市街地そのものも解体の危機にあるような地域も現実には少なくない。北海道をはじめとしたこのような課題を抱えた地域や市街地における将来のまちづくりのあり方やそれに対応した施策を広く検討するにあたっては、そのような地域や市街地のモデルケースを明らかにしておく必要がある。そこで本研究では、北海道内の各市町村のいわゆるメインストリートに着目し、鉄道駅や国道等の都市間幹線道路などとの立地関係をもとに市街地構造をモデル化し、街路および街並み景観の整備状況を加味して、これらの類型ごとに、メインストリートの現状およびその印象と課題について考察する。

A: デザイン作品部門

地域価値を高める橋梁デザイン～歩道橋にみるコンセプチュアルデザイン

安仁屋宗太(株式会社イー・エー・ユー)／二井昭佳、樫木洋子、上原一真、松井幹雄、松井哲平



近年、魅力的な公共空間の創出により、地域・都市再生を目指す動きが世界的に加速している。その代表格は道路空間再編プロジェクトで、水辺を核としたエリア再編プロジェクトも増えつつある。こうした状況に対し、地域価値を高める橋梁のあり方が求められている。上記の背景のもと、景観デザイン委員会の橋梁デザイン小委員会では、2022年度より「地域価値を高める橋梁デザイン論」の構築を目指した研究活動を実施している。本稿では、国内の歩道橋における「コンセプチュアルデザイン」の事例として、桜小橋および竹芝デッキのデザインプロセスを紹介する。

D: 調査・研究部門

岩手県大船渡市の差し込み型防災集団移転促進事業における地域特性の影響

車谷綾花(法政大学)／福島秀哉、福井恒明



差し込み型防災集団移転促進事業は、従来の防集事業に比べ、コストが抑えられる、工期が短い、コミュニティを維持できる等の利点から、今後の災害後の復興や事前復興への適用が期待されている事業手法である。一方、差し込み型防集事業はコミュニティ等の地域特性が事業推進に影響しやすいという特徴があるが、住民の取り組みの状況や地域特性が計画に与えた影響についての知見の蓄積は未だ十分ではない。本研究は、差し込み型防集事業を活用した代表的な地域である岩手県大船渡市を対象に、事業プロセスを整理した上で、地域特性との関係を明らかにすることを目的とする。協議資料等の文献調査や、大船渡市や住民へのヒアリング調査を通して、計画プロセスの実態を整理し、既存の地域特性が差し込み型防集事業に与える影響の一部を明らかにした。

協賛広告 (50 音順)

第19回景観・デザイン発表会の開催にご協力を賜り、誠に有り難うございました。
厚く御礼申し上げます。
展示ホールには、協賛企業紹介ブースもございますので、そちらもご覧ください。



株式会社イワタ 舗装外構事業部 西関東営業所
静岡県静岡市清水区長崎 300 TEL.054-345-1171 東京都江東区青海 2-7-4 theSOHO 638 号 TEL.03-6426-0145

価値ある環境を未来に



株式会社
エイト日本技術開発

岡山本店 〒700-8617 岡山県岡山市北区津島京町3-1-21
TEL. 086-252-8917 FAX. 086-252-7509
東京本社 〒164-8601 東京都中野区本町5-33-11
TEL. 03-5341-5111 FAX. 03-5385-8500





RDC 株式会社 地域開発研究所
Regional Development Consultants Co., Ltd.

〒110-0015 東京都台東区東上野2-7-6 東上野 T・Iビル
http://www.rdco.co.jp/
TEL 03-3831-2916 FAX 03-3836-4048



START for Tomorrow
株式会社 千代田コンサルタント
CHIYODON
http://www.chiyoda-ec.co.jp/



人を、暮らしを支えていく、
総合建設コンサルタント。

CFK
CREATIVE & FULL KNOWLEDGE

中央復建コンサルタンツ
www.cfk.co.jp





Biei River-Blue Pond
Cycling Course

Biei station → Blue Pond → Shirogane Hot springs

20.8km

QR Code

Caution 高さ制限 Maximum height 2.5m

Asahikawa
★Biei 美瑛
Sapporo

ゆっくり
Slow
Down

青い池
Aoi Ike-Blue Pond

株式会社ドーコン | 美瑛川・青い池サイクリングコースのデザイン(北海道)



日軽エンジニアリング株式会社

〒136-0071 東京都江東区亀戸2-35-13 新永ビル TEL. 03-5628-8516



NIKKEN

EXPERIENCE, INTEGRATED

日建設計

代表取締役社長 大松 敦

東京都千代田区飯田橋 2-18-3 Tel. 03-5226-3030

<https://www.nikken.jp>



NITTO
橋梁・ペデストリアンデッキ・歩道
次代をつなぐセラミックス

視覚障害者誘導用タイル 景観色追加

床タイル：フリーセクション KGS-3030-特注色
福山駅北口スクエア【広島県福山市】

株式会社 ニットー
CERAMIC TILE FOR LANDSCAPE

本社：岐阜県土岐市駄知町1707-2 TEL 0572-50-1550
営業所：東京、仙台、大阪、福岡
<https://www.nitto-web.jp>

この世界に、新しい解を。
Innovative solutions for the society

国登録有形文化財「森村橋復原プロジェクト」(静岡県)
2020年度土木学会賞 田中賞(作品部門)
2021年度土木学会インフラメンテナンス賞(インフラメンテナンスプロジェクト賞)

yec 八千代エンジニアリング株式会社



PUBLIC FURNITURE

PUBLIC FURNITURE SPECIAL WEBSITE
www.ypole.co.jp/publicfurniture

NEW

パブリックファニチャーに新製品が登場！

ダクタイル鋳鉄製支柱と、Φ13mm縦材で構成したシンプル形状柵です。独自のジョイント金具を採用し、立体感とシャープさを強調します。

支柱デザインは3タイプをご用意し、様々な設置環境にご利用いただけます。

ヨシモトポール株式会社 www.ypole.co.jp
〒100-6919 東京都千代田区2-6-1 (丸の内パークビルディング19F)
TEL.03-3214-1552 FAX.03-3212-1751

2023年度 景観・デザイン研究発表小委員会

名簿(発表会・講演集担当)

委員長	水谷 智充	(株) 千代田コンサルタント
副委員長	林 昌弘	(株) ドーコン
	山口 敬太	京都大学
担当副委員長	横山 公一	(株) 株式会社プランニングネットワーク
	加藤 孝二	日軽エンジニアリング(株)
	梶川 遥奈	中央復建コンサルタンツ(株)
	植村 真雄	(株) 建設技術研究所
	西川 智貴	八千代エンジニアリング(株))
	石倉 捷	(株) エイト日本技術開発
	芳賀 徹也	大日本ダイヤコンサルタント(株)
開催地委員	谷下 雅義	中央大学
開催校委員補佐	中井 祐	東京大学
委員	菅原 遼	日本大学
	牛木 伸行	(株) オリエンタルコンサルタンツ
	近藤 智寛	クリヤマ(株)
	高 恒	アジア航測(株)
	高尾 忠志	(一社) 地域力創造デザインセンター
	松村 葵	(株) ドーコン
	成田 光裕	(株) 千代田コンサルタント
	前田 知枝	八千代エンジニアリング(株)
	村松 幹允	(株) 日建設計
	村松 萌生	(株) エイト日本技術開発
	中村 遥	中央復建コンサルタンツ(株)
	渡邊 裕貴	パシフィックコンサルタンツ(株)
	島袋 全仁	日軽エンジニアリング(株)
	藤井 俊輔	(株) 地域開発研究所
	八尾 修司	大日本コンサルタント(株))
	八木 弘明	山田照明(株)
	浜本 嶺	大成建設(株)
	鈴木 拓水	いであ(株)
	鈴木日奈子	(株) 建設技術研究所

土木学会 第19回景観・デザイン研究発表会

主催 公益社団法人土木学会 景観・デザイン委員会

日時 2023年12月9日(土)～10日(日)

会場 中央大学 後楽園キャンパス

協賛(50音順) 株式会社イワタ

株式会社エイト日本技術開発

株式会社オリエンタルコンサルタンツ

クリヤマジャパン株式会社

昭和鉄工株式会社

大日本ダイヤコンサルタント株式会社

株式会社地域開発研究所

中央復建コンサルタンツ株式会社

株式会社千代田コンサルタント

帝金株式会社

東京建設コンサルタント

株式会社ドーコン

株式会社トーニチコンサルタント

日軽エンジニアリング株式会社

株式会社日建設

株式会社ニッソー

株式会社プランニングネットワーク

八千代エンジニアリング株式会社

山田照明株式会社

ヨシモトポール株式会社

令和五年(2023)11月発行

発行者: 公益社団法人土木学会 景観・デザイン委員会

〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目 外濠公園内

TEL 03-3355-3559

技術(編集)協力: トーヨー企画株式会社

©公益社団法人土木学会

無断掲載・複製・引用を禁じる